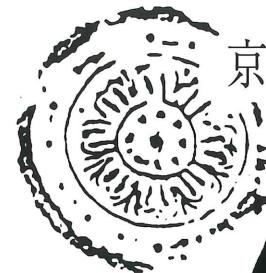


京都市文化観光資源保護財団

今報



89

NO.

2005. 5. 20

もくじ

—寄稿—

「深泥池の歴史」

P 2

京都産業大学日本文化研究所教授・所長
京都市歴史資料館館長 井上満郎

—特集—

京都の近代を飾った名建築家たち－1

「京都に洋風建築を伝えたミッション建築家」 P 5

大阪歴史博物館学芸員 酒井一光

—保護財団の活動—

P 9



深泥池の歴史

井 上 満 郎

池とは何か

歴史上、「池」にはふたつの意味がある。ひとつは農業用水を貯めるための施設として、いまひとつは観賞用に作られた庭園の一部としてである。

前者の水を貯めるための池とは、農業用水を確保する施設であって、多くは谷筋をせきとめ、また平地に土手を築いて、そのなかに貯水され、用水路を通じて田地に灌漑される。農業生産への能率のみが求められ、建設にあたって池の浄化や周囲の景観などが考慮されることはない。

後者の庭園の池は、自宅内に水を引いて観賞する小規模なものから、大きなものは船を浮かべができるほどのものまであって、たとえば宮城すぐ南にあった、かつては東西約二百五十メートル・南北五百メートルもあった大庭園の神泉苑の池では舟遊びが実際に行なわれている。

むろんこの両者は完全に役割が区分できるわけではなく、庭園の池である神泉苑の池水はことあるごとに放水されて、平安京南郊外に暮らす農民たちの田地への灌漑用水として使われた。

深泥池は自然の池で、人工的に築造されたものではないが、歴史のうえからは灌漑用・観賞用の両方の側面を持っていた。ただ、多

くの他の人工池と異なり、最初からそこに存在したいわば自然の池であるという特徴をもつが。

初めてこの池が京都に暮らす人間との関わりをもったのは、灌漑用水としてである。深泥池周辺地域では、たとえば植物園北遺跡などすでに弥生時代に人間生活の足跡が確認されており、このころから水田に灌漑するための用水として、池水が使用されたであろうことが推定される。

しかしこの利用がきわめて地域的に限定されたものであり、コミュニカルなものであることに、注意が必要であろう。深泥池は、古い時代には京都に暮らす人々全体の生活に関係するものではなかった。池のごく一部の周辺地域にのみ、関係を持った。

平安京と深泥池

794（延暦13）年、京都は日本の首都となった。皇族・貴族や国家の官僚たちが新しくここに移住してきた。深泥池とその周辺は、普通の農村から一挙に都市郊外となったのである。



深泥池

京都盆地の東北縁、岩倉盆地と接する場所に位置し、周囲約1.5km、面積約9haの池で、大都市には珍しい湿原、浮島がある。池に生息する動植物は生物群集として、国の天然記念物に指定され、保護が図られている。

る。これによって深泥池は、十数万という平安時代の日本最大の人口をほこる首都の近郊となり、貴賤の人々に親しまれることになった。

深泥池のことが最初に歴史史料に登場するのは、829（天長6）年10月のこと、当時の淳和天皇が狩猟を行なっている。平安京北郊外にあった離宮の紫野院に滞在し、そこからさらに北にある深泥池に出かけたことになる。狩猟の対象は「水鳥」であったが、皇族・貴族の娛樂としての狩猟が、池周辺で行なわれた。平安京近郊にはいくつもの遊獵地があったが、深泥池周辺もその一つとして親しまれたのである。

平安京に暮らす人々の、参詣道としても深泥池は利用された。池の西を通り、急な坂を幡枝へ越え、そこから木野を経て鞍馬寺・貴船神社へ参詣する。著名な後白河法皇の大原御幸を「平家物語」は、法皇がこの「鞍馬通り」と呼ばれた道を通って大原へ向かったと記している。

また一般庶民の参詣について記録した「梁塵秘抄」は、「貴船へ参る道」として鴨川を北上し、「御菩薩池」を経る貴船神社へのコースをあげるし、さらにまた謡曲「鉄輪」には糺ノ森から深泥池（御菩薩池）を経て市原野・鞍馬川経由で貴船神社への道が記されている。

皇族・貴族のみでなく、京都に暮らす多くの庶民までが、時代を越えてこの池と接触を持つようになった。平安時代最大の女流歌人の和泉式部は、深泥池について

なをきけば 影だにみえじ みどろ池に
住水鳥の あるぞあやしき
と詠んだ。名前を聞いていいるもの影すら見



一貴船神社—
京都市北区上賀茂
深泥池町

えないほどの深泥池だが、その池に水鳥が住んでいるというのは不思議なことだ、という意味である。和泉式部はおそらくは貴船神社・鞍馬寺に参詣の途中にこの池の側を通り、池の姿に歌作の意欲をもよおしてこの歌を詠んだものであろう。「人離レタル所」ではあったが（「今昔物語集」）、人間生活と深い関わりを持つ池であった。

神と仏の池

和泉式部が「あやしき」池と詠んだのは、この池が神の宿る池でもあったからと考えられる。鞍馬への街道に面して東へ、低い山に囲まれて奥深く広がる深泥池は、そこに神がいると認識されていた。

深泥池には、大蛇が住んでいたという伝説がある。「小栗絵巻」という説話集に見えるものだが、蛇は竜と並んで水をつかさどる神の化身である。竜神もかつて池中に祀られていたという伝えもある。また池の端の穴には「鬼神」がいたともいい、豆を投げてこれを退治したのが節分の起りだという（「京師巡覧集」）。

これらの伝えから、深泥池には敬虔な地元の池の信仰が、脈々として息づいているこ



—深泥池地蔵—（現 京都市北区 上善寺藏）

とがよく理解できる。貴船神社は水の神様であるが、深泥池村にこの神社が祀られているのは、貴船神社への参詣道であったということもむろんであろうが、池の水神への畏れがあったことをも見逃すことができない。

仏についても同様で、平安時代の末ごろに池の近くに地蔵菩薩が祀られた。京都から地方へ向かう辻々の要衝に六体の地蔵が建設されるが、その一つが深泥池に安置された（「源平盛衰記」）。六か所はともに交通の要地で、深泥池もそうした人々の行き交う要地の一つであったことが分かる。

様々な暮らし

京都は巨大な消費地だから、食料がその典型的だが、あらゆる消費物資を確保するためにたえず周辺農村との緊密な関係を必要とする。中世・近世の、京都から地方に発する交通路は「京の七口」と呼ばれたように七か所があったが（実際にはそれより多かった）、その一つに「若狭口」として「御菩薩池」があげられており（「京都御役所向大概覚書」），深泥池の西を通る道の重要性がよく理解できる。中世には池のそばに関所がもうけられているが（「親長卿記」），これも人馬の通行や物資の流

通が盛んであることを物語るものである。通過地としてであったが、池とその周辺の持つ性格は、古代からずっと引き続いていたのである。

深泥池の村人の生活ということでは、土一揆の起こったことが注意される。土一揆とは、農民が武装蜂起して税の減免などを領主に要求するものだが、団結力が強く、情報収集にすぐれた自治意識の高い農村が起こすことが多い。深泥池村の、先進的な性格がよく分かる。

早くに河骨こうはねが採取されていることも（「言經卿記」），じゅんきい蓴菜わさびがこの池の特産物であることと考えあわせて興味深い。河骨は蓴菜とよく似たスイレン科の植物で、漢方薬にする。深泥池が単なる貯水池ではなく、その他にも人間の生活に関係する役割を持っていたことが理解できる。

あまり知られていないが、江戸時代の著名な文化人の池大雅の「池」はこの深泥池の池であった。深泥池村の富裕な農民の家に生まれ、画家として大成したが、落款に「深澤池氏」と刻むほどにこの池には終始愛着を持ち続けた。

また深泥池では陶器製作も行なわれ、それは深泥池焼と呼ばれたが、京焼の名人の野々村仁清も一時ここに住んで作品作りにあたった。発展する都市京都の郊外にあって、周縁として交通や文化のうえで重要な位置を、歴史を通じて深泥池とその周辺は占め続けたのである。

（京都産業大学日本文化研究所教授・所長）
（京都市歴史資料館館長）

特集 京都の近代を飾った名建築家たちー1

京都に洋風建築を伝えたミッション建築家

酒井一光

はじめに

ミッション建築家が活動したのは、教会やキリスト教系の学校など、ごく限られた領域であるかもしれない。とはいえ、京都で文化財に指定、登録されている建造物の多くが彼らの設計であることを考えたとき、その実績と影響力は決して無視できないものといえよう。

本稿では、ミッション建築家を、来日した外国人のうちで、キリスト教伝道を目的に活動した建築家、宣教師で設計もこなした者、伝道目的の施設を設計した建築家を指す緩やかな意味としてとらえたい。

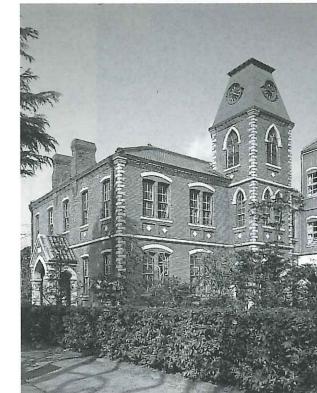
近代京都におけるミッション建築家の役割を、5人の活動を通して考えてみよう。

1. D.C.グリーン

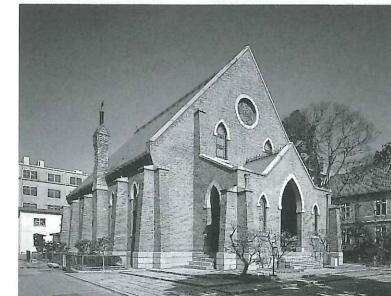
新島襄が創設した同志社に最初の煉瓦造建築が実現したのは、明治17年竣工の彰栄館である。設計は同志社教員だったグリーン（Daniel Crosby Greene, 1843-1913）が行った。

グリーンは合衆国マサチューセッツ州で、アメリカン・ボード（米国外国伝道委員会）の一員に生まれた。祖父は大工であり建築家でもあったが、彼自身は直接建築を学んだわけではない。明治2年、グリーンはアメリカン・ボード宣教師となり来日し、当初は神戸を中心に活動した後、明治15年に同志社へ赴任した。

彼の設計した建築は同志社彰栄館、礼拝堂、



上：同志社彰栄館
(明治17年)

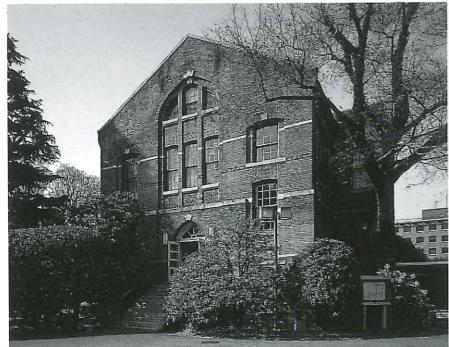


下：同志社礼拝堂
(明治19年)

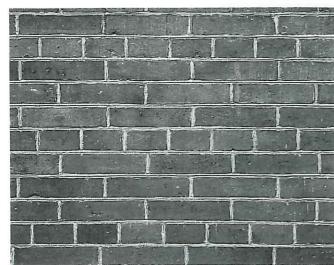
有終館の3棟である。いずれも煉瓦造であるが、その性格は少しずつ異なる。

彰栄館は時計塔のある美しい建築であるが、細部意匠にはいくらかぎこちなさが残る。例えば廊下の壁と天井の間に設けられた繩形（凹凸を持った装飾的な曲面）や、玄関の上の窓（ファンライト）などをみると、苦心の跡がうかがえる。

礼拝堂は細部まで洗練されたつくりの建築である。屋根を支える独特の小屋組やアーチ窓の棟などは、それまでの京都の寺社建築とくらべても、引け目を感じさせない。繊細な建具には色ガラスがはまり、内部に独特の輝きをもたら



上：同志社有終館
(明治20年)



下：同志社礼拝堂のアメリカ積煉瓦壁
(煉瓦の長い面を三段、短い面を一段ずつ繰り返し積んでいる)

している。

有終館では、外壁に用いられた赤煉瓦と黒煉瓦のコントラストが見事である。黒煉瓦は焼き過ぎ煉瓦ともいわれ、通常の赤煉瓦よりも高温で焼いたものである。煉瓦建築としての細部意匠も、一作ごとに洗練度を増していった。

本来建築家でないグリーンが、どこまで細部意匠に関わったかは想像の域を出ない。しかし3棟とも煉瓦の積み方にアメリカ積が用いられているところをみると、グリーンがある程度細部にまで指導をした可能性がある。これら3棟は初期煉瓦造建築の優品として、全国的にも貴重な実例といえる。

2. ハンセル

同志社を代表するもう1棟の赤煉瓦建築・ハリス理化学館の設計は英国人ハンセル(Alexander

Nelson Hansell, 1857-1940)による。ハンセルはフランスのカーンに生まれ、イギリスで建築の修行をした後、明治21年に来日し、大阪・川口居留地の三一神学校教師に赴任した。後に神戸に住み設計活動を行うが、ハリス理化学館は彼が来日して最初期に手がけた建築である。

ハリス理化学館は左右対称の安定した構成をとり、細部にいたるまで破綻のない建築といえよう。内部で当時の様子がしのばれるのは階段である。新島襄は、ハリス理化学館の建築工事中に息を引き取った。学生たちは彼の柩を理化学館工事現場の木材で担ぎ、それが後に同館の階段手摺りの一部に使われたという伝説が残されている。今やその伝説は確かめようもないが、そんな言い伝えが起こってもおかしくないような、威厳に満ちた階段である。階段は近代建築の大きな見せ場のひとつで、玄関ホールにどんな階段を配置するかは、生まれつき欧米で育った建築家たちの独壇場といえるものだった。

同じく階段の構成を活かしたハンセルの代表作のひとつが、平安女学院明治館である。御所のすぐ西側に建つ煉瓦造2階建の優雅な建築で、3つの急傾斜の切妻屋根が高くそびえたつ。明治館1階西側は柱がならび、上階を支えるピロティになっている。この上には講堂があるが、



同志社ハリス
理化学館
(明治23年)



平安女学院
明治館
(明治27年)

講堂は階段の踊り場の高さ、つまり中二階にある。階段は1階と2階を結ぶだけでなく、中二階をつくり建築を立体的な構成としたのである。

ハンセルは後に英國王立建築家協会正会員となつた。当時、同正会員だったのは日本では他に、工部大学校造家学科(現・東大建築学科)教師だったジョサイア・コンドル(Josiah Conder, 1852-1920)のみであった。当時のヨーロッパの建築水準と比肩し得る実力をもつた建築として、この2棟は日本近代建築史上特筆される。

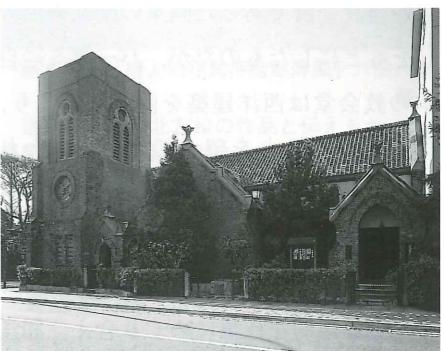
3. ガーディナー

ガーディナー (James McDonald Gardiner, 1857-1925) は合衆国セントルイス生まれの建築家で、明治13年に来日した。彼は単に洋風建築を日本に移植しただけではなく、日本建築の伝統とも深く向かい合つて設計に取り組んだ。彼の代表作には、聖アグネス教会や長楽館がある。

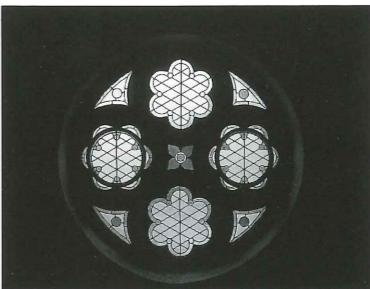
聖アグネス教会はダイナミックな屋根形態を特徴とし、窓には巧みに色ガラスをとりいれ、聖堂内を美しく装飾している。煉瓦やガラスといった素材の持ち味を最大限に引き出す素材の魔術師の如き活躍を見せた。

長楽館はタバコ王と呼ばれた村井吉兵衛の邸宅として建てられ、円山公園の傾斜地と呼応した立体的な内部空間の構成に特徴がある。部屋

ごとに異なる西洋建築の様式を取り入れ、日本人建築家の到達しがたい境地を示すと同時に、本格的な和室や「残月」写しの茶室を邸内に立体的に取り入れた。和室の設計には彼の下での日本人所員の活躍が大きかったと想像されるが、今までの日本建築にはないダイナミックな空間の中に、和風建築を融合させることに果敢に取り組んだ。日本における西洋建築のあり方を、外国人として示した初期の例として注目に値しよう。



上：聖アグネス教会
(明治31年)



中：聖アグネス教会
塔屋の窓



下：長楽館(明治42年)
階段室

4. バーガミニ

アメリカ人ミッション建築家であるバーガミニ（John van Wie Bergamini, 1888-1975）もまた、日本における西洋建築のあり方を探求した建築家である。大正15年に来日し、東京の聖路加国際病院病棟・礼拝堂などを設計したことでも知られている。

彼の京都での作品のひとつ、京都聖三一教会では外壁や柱に和風の趣を与え、屋根を桟瓦葺とするなど、和風の外観が取り入れられた。これは当時の建設委員であった画家の園部秀治の基本設計をもとにしたものだが、バーガミニ自身も日本の教会堂は西洋建築を直写するより、和風を取り入れることを望んでいたといわれる。しかし、平安女学院昭和館をはじめ彼が日本で設計した建物は、ほとんどが純粋な西洋建築であった。その意味でこの教会は、バーガミニにとっても理想的な仕事にめぐり合え、和洋の意匠の融合に取り組んだ記念すべき作品だったのではないだろうか。



京都聖三一教会
(昭和5年)



京都御幸町教会
(大正2年)

る建物はほとんどが純粋の西洋建築であった。

京都御幸町教会では、礼拝堂と集会室を区切る扉を上げ込み戸とするなど、合理的なディテールが印象的である。細部意匠も洗練され、煉瓦の装飾的な積み方では彼の右に出るものは少ないであろう。御幸町教会正面の尖頭アーチ窓は、外から見ると鋳鉄を思わせる繊細な模様であるが、実際には木製の引き違いの建具が入れられている。この細やかさが、京町家とも通ずる点であり、彼の建築が広く受け入れられる要因でもあっただろう。

ヴォーリズは他のミッション建築家にくらべ、作品数が桁違いに多い。しかし、ヴォーリズの事務所の作品で失敗作というのを聞いたことがない。伝道師として来日した彼がもたらしたものは、建築の見た目の美しさの背景にある、質と合理性の追求であろう。

おわりに

一口にミッション建築家といっても、建築家としての素養や活動期間はまちまちである。しかし、一貫してどこかに日本人建築家とは異なる素質があった。細部意匠の充実、あるいは合理的な考え方や立体的な空間把握は、日本人建

築家がたやすく到達できない点であった。また、彼らは外国人の目で西洋と日本の建築の異質性と共存を摸索していたのではないだろうか。

京都は、日本の伝統の核と触れ合う場所として、彼らの心をくすぐり、あるいは葛藤させた

ことだろう。^{いらか} 薩の中から飛び出した赤煉瓦の塔は、伝統ある町並みの中では異質なものだが、京都の近代化の試行錯誤を刻んだ風景として共存に値するものではないだろうか。

(大阪歴史博物館学芸員)

平成16年度 文化観光資源保護事業助成

平成16年度助成申請がありました四大行事及び伝行事芸能の保存及び執行、文化観光資源の建造物、美術工芸品等の保護事業79件に対し、総額6,807万円を助成しました。助成対象は、下記のとおりです。

◇四大行事（葵祭・祇園祭・大文字五山送り火・時代祭）の執行に対する助成

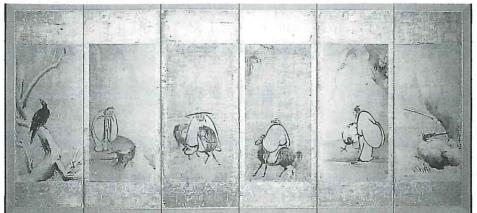
対象件数 4件 助成金 3,948万円

◇四大行事の保存（祇園祭山鉾修理・大文字五山送り火火床整備の各事業）に対する助成

対象件数 19件 助成金 704万円

長刀鉾一車軸修理、鶴鉾一車軸修理、月鉾一車軸修理、占出山一山櫓貫修理、八幡山一山櫛干手摺修理、船鉾一御神体頭髪新調、岩戸山一山屋根鬼板修理、保昌山一金幣修理、蟻蟻山一蟻蟻鎌つけ根修理、四条傘鉾一櫛縁新調、綾傘鉾一駒形提灯新調、油天神山一水引修理・櫛縁修理、南觀音山一山櫛縁修理、木賊山一文箱修理、大文字一総刈り等、松ヶ崎妙法一「法」総刈り等、船形一通路火床土砂搬出等、左大文字一火床・火床周辺修繕等、鳥居形一通路階段整備工事等

◇文化観光資源（建造物・美術工芸品等）の保護事業に対する助成



一紙本墨画「唐人物花鳥押絵貼屏風」六曲一隻一

蔵：靈洞院

当屏風は、海北友松の作品と伝えられ、人物や雪中鳥等を描いた押絵が貼られている。虫害、老朽化等による損傷が著しいため、修復された。

対象件数 16件 助成金 1,242万円

建造物の部 9件 助成金 580万円

賀茂別雷神社一末社橋本社及び境外末社小森社屋根葺替工事、觀音寺一鐘樓屋根葺替工事、久多上の宮社一本殿高欄等修理工事、賀茂御祖神社一摂社河合神社本殿修理工事、安樂寺一本堂修理工事、長樂寺一本堂修理工事、教王護國寺一本坊客殿薬医門修理工事、隣華院一客殿落縁並びに敷瓦修理工事、愛宕念仏寺一仁王門屋根棟瓦積修理工事

美術工芸の部 2件 助成金 122万円

靈洞院一紙本墨画「唐人物花鳥押絵貼屏風」六曲一隻修理、瑞光寺一木造聖觀音菩薩立像修理

防災施設の部 3件 助成金 210万円

(財)冷泉家時雨亭文庫一土蔵（常蔵）外壁等修理工事、靈鑑寺一土蔵（人形蔵）修理工事、松尾大社一境外末社綱敷行衛天満宮本殿覆屋

5. ヴォーリズ

ヴォーリズ（William Merrel Vories, 1880-1964）は合衆国カンザス州生まれの伝道師で、明治38年に滋賀県近江八幡に赴任した。ヴォーリズは日本文化を愛し、日本名・一柳米来留^{ひとつやなぎ め れる}を名乗ったが、バーガミニらと異なり、設計す

修理工事

その他施設の部 2件 助成金 330万円

(財)靈山顕彰会—靈山一帯及び各招魂社周辺整備、(財)京都古文化保存協会—松毛虫駆除事業
◇伝統行事、芸能の保存執行に対する助成

対象件数 40件 助成金 913万円

行事の部 14件 助成金 447万円

嵯峨御松明、賀茂競馬、藤森駄馬、糺の森流鏑馬、鞍馬山竹伐り、花脊松上げ、広河原松上げ、雲ヶ畠松上げ、鳥相撲、瑞饋祭、北白川高盛御供、日野裸踊、鞍馬火祭、松尾祭桂川舟渡御

芸能の部 26件 助成金 466万円

蹴鞠、雅楽、念仏狂言(壬生、神泉苑、千本えんま塗、嵯峨)、六斎念仏(吉祥院・久世・中堂寺・梅津・小山郷・千本・嵯峨野・壬生・円覚寺・西方寺・桂)、やすらい花(川上・今宮・玄武・上賀茂)、久多花笠踊、八瀬赦免地踊、松ヶ崎題目踊、大原八朔踊、上棟祭

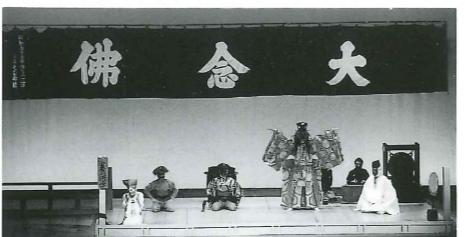
助成文化財の紹介

雲ヶ畠松上げ

京都市登録無形民俗文化財
毎年、8月24日に京都市北区雲ヶ畠の出谷町と中畠町の2箇所で、愛宕山への献灯行事として行なわれます。花脊、広河原、久多の松上げとは内容、形態が異なり、点火当日の昼間に山の上へ資材を運び、100束余の真割木の松明を3メートル四方の字の形をした櫓にくくりつけ、夜になって、松明に点火された櫓を直立させます。点火される字体は毎年異なり、点火まで秘密にされているところも特色のひとつです。当財団では、設立当初より助成を行なっています。

(表紙写真掲載)

第35回 京の郷土芸能まつりを開催



毎年、恒例となっています郷土芸能まつりを3月6日に「京の四季」をテーマに京都会館第一ホールにおいて1,485名の観客を迎えて開催しました。今回は、小京都・三重県伊賀市「伊賀一宮・伊賀國神社獅子神楽」の特別出演を含む6演目をご覧いただきました。

「京の文化財探訪」事業を実施

4月2~10日に尼門跡寺院「靈鑑寺」春の特別公開を実施しました。京都市指定天然記念物の「日光椿」をはじめ30数種類の椿が咲く庭園を8,623名の方が見学されました。

理事会・評議員会報告

4月19日に第60回理事会評議員会を開催しました。会議では、平成16年度事業報告並びに収支決算、平成17年度事業計画並びに収支予算等が審議され、それぞれ原案のとおり承認されました。

役員の異動(順不同・敬称略)

新任役員

常任理事 水越 浩司(神戸商工会議所会頭)

理 事 星川 茂一(京都市副市長)

評議員 井上与一郎(京都市会文教委員長)

〃 佐藤 諦学(総本山知恩院執事長)

〃 佐々木正丞(北海道経営者協会会長)

平成16年度
文化観光資源保護協力者感謝状贈呈式・
伝統行事芸能功労者表彰式を実施

京都市文化観光資源保護基金に多額のご寄付を寄せていただいた10名の方々と、長年にわたり京都の伝統行事芸能の保存と継承に尽力された14名の功労者に対し、それぞれ感謝状・表彰状並びに記念品を贈呈しました。(順不同・敬称略)

□伝統行事芸能功労者

岡本 清仁(賀茂競馬保存会)、原田 守啓(藤森神社駄馬保存会)、藤田 健二(北白川伝統文化保存会)、杉本 光男(鞍馬火祭保存会)、筋栄次(一乗寺八大神社剣鉾保存会)、今井 幸雄(嵯峨祭奉賛会)、土山 一郎(蹴鞠保存会)、河南泰弘(平安雅楽会)、中村 明吉(吉祥院六斎念仏保存会)、中谷 三雄(梅津六斎保存会)、岡本 紘(今宮やすらい会)、瀬戸 景之助(市原ハモハニ講中)、岡本 謙次(一乗寺郷土芸能保存会)、小倉 吉一(広河原郷土芸能保存会)

□文化観光資源保護協力者

柴田利男、渡辺道子、仲谷滋、西原壽子、恒成恒、佐藤和央、小野英治、小島文子、宮田喜義、山田順三



三大祭観覧ご招待—祇園祭・時代祭—

祇園祭の山鉾巡行(7月17日)、時代祭行列(10月22日)の当財団観覧席にそれぞれ30名様をご招待します。

観覧ご希望の方は、当財団インターネットホームページの会員専用サイト又は、はがきで下記要領にてお申込下さい。

申込資格:会員ご本人に限る(一名のみ)

申込方法:会員番号・氏名・郵便番号・住所・電話番号・いずれかの祭名を明記してください。

当財団インターネットホームページ

URL <http://www.kyobunka.or.jp> 会員専用サイトはがき宛先

〒606-8342 京都会館内

(財)京都市文化観光資源保護財団事務局

三大祭観覧事業係 宛

※お申し込みは、法人個人ともに一回のみ

※お申込多数の場合は抽選とし、当選者の方のみ、招待券を発送させていただきますのでご了承下さい。

※申込締切 6月30日(木)必着

※招待券の発送は、祇園祭は7月初旬、時代祭は10月上旬の予定です。

インターネットホームページ

—京都その文化遺産の保護と未来のために—

当財団のホームページでは、京都の様々な文化財などの紹介や普及啓発事業などを順次発信しています。又、会員専用のサイトを開設し、会員限定事業のご案内等も行っています。

URL <http://www.kyobunka.or.jp>

刊行物のご案内

京都市より京都市文化財ブックス第19集「庭園の系譜」(A4版、94ページ)が発行されました。平安時代から近代までの京都の庭園

を中心し、発掘調査の成果や絵巻物・古図等の分析を通じ、多種多様な庭の成り立ちを解説し、その系譜が紹介されています。

会員の皆様でご希望の方は、当財団事務局において、1,300円（送料別）で頒布していますのでお申し出下さい。

平成17年度 事業計画

I. 文化観光資源保護事業

◇文化財所有者・管理者等の行なう文化観光資源の保存修理、防災施設整備等の保護事業に対する助成

◇四大行事並びに伝統行事、芸能の保存執行に対する助成

◇文化観光資源をとりまく自然環境の保全及びその整備に対する助成

◇文化観光資源管理

京都市嵯峨鳥居本町並み保存館の管理運営、京都市管理の史跡・名勝・天然記念物24カ所の保存管理業務

名勝 双ヶ岡、史跡 天皇の杜古墳、史跡 醍醐寺境内（桙柱遺跡）、天然記念物 深泥池生物群集、史跡 御土居（7か所）、史跡 方広寺石塔（耳塚、馬塚）、史跡 鳥羽殿跡、史跡 栗栖野瓦窯跡、史跡 平安宮豊楽殿跡、史跡 平安宮内裏内郭回廊跡、史跡 横原廢寺跡、史跡 蛇塚古墳、史跡 西寺跡、京都市登録史跡 福西遺跡公園、史跡 天塚古墳、京都市登録建造物 島原大門、史跡 山科本願寺南殿跡、京都市指定史跡 上中城跡（新規）

◇文化観光資源に関する調査研究

伝統行事芸能の実態調査及び写真記録、助成対象文化財の実態調査及び資料の収集、「文化的景観（北山杉の林業景観）」の保存・活用事業調査の受託（新規）

◇文化財保護行政機関などとの協議

II. 文化観光資源保護思想の啓蒙普及事業

◇会報の発行

◇文化観光資源に関する印刷物の発行

◇文化観光資源公開事業の実施

- ◇インターネットによる国内外への情報発信
- ◇文化観光資源保護協力者並びに伝統行事芸能功労者に対する表彰
- ◇文化観光資源保護協力者（会員）に対する招待事業等
- ◇文化観光資源保護関係団体等が行なう各種事業の後援
- ◇報道機関による啓蒙活動の積極的推進
- III. 募金活動
- ◇現会員に対する追加募金の呼びかけ
- ◇市民募金運動の推進としての啓蒙普及事業を通じての新規法人、個人募金の呼びかけ

お知らせ

当会報にあわせ発行してきました「寄附者芳名録」は個人情報の保護のため、今回より、作成を取り止める事としました。なお、会員の皆様方で寄附金累計額等を確認されたい場合は、事務局までお申し出下さい。



編 集 後 記

□本号では、井上満郎京都産業大学教授から、生物群集が国の天然記念物に指定されています「深泥池」の歴史について貴重なご寄稿をいただきました。ご一読いただき「深泥池」について更にご理解を深めていただければ幸いです。

又、今回より「京都の近代を飾った名建築家たち」のテーマで、4回にわたり学識者の方々からご執筆をいただきます。京都の近代建築の特徴のみならず歴史的な背景や建築家たちの想い等も促えていただけることと思います。

会報 No.89

会報題字／理事長 上山善紀
会報表紙／雲ヶ畑松上げ

2005.5.20

撮影 神崎順一

編集・発行／財団法人京都市文化観光資源保護財団
京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
〒606-8342 TEL 075 (752) 0 2 3 5
FAX 075 (752) 0 2 3 6